宝光寺茶園にて

六月二月（水）午後三時。

成都市街の北、新都県にある宝光寺（パオクァンスー）境内の茶園にいる。雨は降らないけれども、相変わらずのどんよりとした空。

境内の一角に設けられた茶園には辛うじて肌に感じられるほどの風が流れていて、それはまるでこの茶園に流れる時間のように穏やかだ。

テーブルの上には一級花茶（七角）。ポットを手にした茶園の人が時おりお湯を注ぎ足していくので、お茶はいつも一杯だ。

穏やかな時間の流れの中を、おしゃべりごと運ばれていく老人たち。その動作のようにゆっくりと、辛うじて肌に感じられるほどの傾斜のままに。

テーブルの間を、耳掻きとマッサージをする老人が歩いていく。金属性の耳掻きの道具を調子よくカンカンと打ち鳴らしながら。

またお湯が注がれて、湯呑は一杯。熱いお茶に唇を付けて、僕はテーブルのノートにボールペンを走らせる。

※

六月二日（水）。今朝は午前九時に起床し、少し緊張しながら人民解放軍の敷地を出て、バス停へと向かった。火車站の裏側（北側）を走る路線は二四路だけで、バス停は昨夜の食堂の前にすぐに見つかったのだけれども、乗客は満員。おまけに火車站の西側を渡る跨線橋のあたりから車は大渋滞し、結局小一時間も吊り革にぶら下がっていたのだった。

午前の駅前広場は昨夜の疲労を拭い落したかのような新鮮な活気が感じられた。駅前広場を行き交う人々。広場の片側にずらっと並んだ旅行代理店のボックス。そこには成都発、中国各地行きの観光旅行の案内が、これでもかというように貼り出されて、行き交う人々を誘っていた。路線バスは満点の乗客を乗せて次々と発車していく。クラクションとエンジン音と、そして人々の口から発せられる中国語の言葉がこんぜんとなって、白く厚い曇天の下に立ちこめていた。

駅前の安食堂で朝食（三鮮面と肉包子二個）を食べ、腹ごしらえをすませたところでいよいよ西南航空（中国民航）オフィスへ。昨夜購入した成都地図によると民航售票処は市の中心、市政府から少し南に下りたところ、成都第一のホテル、錦江賓館の近くにあるということだ。一六路バスで三〇分ほど。

バスを降りて見まわすと、すぐに西南航空のオフィスビルは見つかっ

た。思わず気後れしてしまいそうな現代的なビルだ。一見してビジネスマン風の男たちがビルを出入りしていた。まさか風体で追い出されることはないだろうなとちょっと本気で心配しながらビル内へ。

　售票処の内部は人が少なくてがらんとした印象でいくつかある窓口の服務員はコンピュータの端末を前にして作業をしているのだけれども、基本的には火車の售票処と同じだった。ボードには各地行きの料金や空席状況が掲示してある。それにしても飛行機のチケットを航空会社のオフィスで購入するという経験がなかったものだから、あっちへうろうろ、こっちへうろうろ、窓口でチケットを購入する人たちの様子を盗み見てはまたうろうろ。意を決して、ひとつだけあった外国人窓口に近づいて声をかけてみたが、服務員は何やら分からない言葉を投げ返すばかり。それでも耳を傾けていると、どうやら休み時間になったので窓口を閉めるということらしい。半分チケットの購入をあきらめかけたのだけれども、気をとりなおして他の窓口に向かった。中国人の客たちを観察していると何か申込書のようなものを窓口に差し出している。それで初めて申込書を書かなければならないということを知ったのだった。今度は申込書を捜して、うろうろうろうろするのだった。ようやく售票処の入口に置いてあった申込書を発見し、それに記入。行き先は拉薩、出発は六月四日（金）。拉薩行きは一日一便（午前六時半発）で、それ以前の便は満席だった。

「外国人は拉薩へは行けません」とか、

「旅行許可証を提出してください」とか言われたらどうしよう、と緊張しながら服務員に申込書を差し出した。

　服務員の女性は事務的に申込書を受け取り、事務的にキーボードを操作する。かたずを飲むようにして、服務員の表情を見ていたのだった。

　ひととおり作業を終えた服務員は事務的に、

「九八〇元」

　と告げる。

　あっけなくチケットを購入できたうれしさと緊張と、値段の高さに震えながらＦＥＣの札を差し出したのだった。ちなみに中国人の料金は約半額だった。チケットを受け取りながらリムジンバスを確認した。オフィス前に午前四時半。飛行機の出発もバスの時間も非常識だと思われる時間だったので、僕は何回も念を押したのだった。

　意外とあっけなかったけれども、なにはともあれ拉薩行きの最大の難関を突破して、僕は解放された気分で西南航空のオフィスビルを出たのだった。現金がいっぺんに無くなってしまったのでトラベラーズチェックを現金にするために錦江賓館へと向かった。途中で闇両替の男たちに声をかけられて、人民幣も補給した。

現金を補給すると、また急に金持ちになったような気がして、ミニバス（一・八元）を奮発して成都火車北站へと戻った。

北站付近の露店で天府コーラ（七角）を飲んだ。冷えてもいないけれども、決してまずくはない。

「天府」というのは成都の人々が自分たちの街を誇って名付けた名だ。その名のとおり成都は三国時代に蜀漢が都と定めて以来、数々の独立王朝の都であった。そしてまた歴史のある古都であるにもかかわらず、一度も統一王朝の都にはなれなかった街でもある。そのことがまたいっそう成都の人々が自分たちの街に愛着を持つ理由にもなっているのかもしれない、とふと僕は思う。成都はまた歴史のある古都にふさわしく「天府」以外にも「錦城」「芙蓉城」などの別名を持っている。

お昼過ぎの少し間延びしたような火車站の雑踏を渡る。あいかわらずの曇天。成都市内の名所巡りは明日にして、今日はちょっと郊外へ行ってみようかと思ったのだ。お目当ては成都市街の北、新都県内にある宝光寺。ガイドブックによれば、火車站の近くから新都行きのバスが出ているはず。

人々が行き交う歩道には二、三個のインク消しを目の前に並べて売っている人がいる。歩道の所々に数人の売り子たちがぼんやりと人波に視線を漂わせている。これでいったい生活が成り立つのだろうか、と僕は心配になる。もうすこし気のきいた売り物はなかったのだろうかと。

臭覚にまかせて歩いていったところに『新都』行きのバスを発見。乗客も少なくて座れそうだったのでそのまま飛び乗った（二・九元）。

バスは成都市街の北端にある火車北站から北方に向かって走るので、すぐに市街地を抜けて田舎道へと入っていった。もっとも田舎道とは言っても田園地帯を走る道路の交通量は多く、その巻き上げる土煙でとても挨っぽいという印象だ。

三〇分ほどで新都に到着。乗客たちがぞろぞろと降りていくのでそれにつられて下車したのだけれども、さて右も左も分からない街に降りたって、お寺らしき建物も目にはつかなくて、僕は立ちつくす。一緒にバスを降りた乗客たちもそれぞれの目的の方へ行ってしまって、ひとりバス道に取り残されたかのようだった。人影もまばらな何かがらんとした印象の街だ。目の前を土煙を上げながらトラックが通り過ぎていった。

いつまでも立ちつくしていても仕方がないので、バスの行ってしまった方向に歩き始めた。不安にさいなまれながらもしばらく歩いていくと、両側にお土産物の露店や商店が並んだ参道らしき道があり、不安に沈んでいた僕の心はにわかにざわつく。平日だからかあまり人影の多くない参道をしばらく行くと宝光寺正門。

宝光寺は五百羅漢で有名な寺で、その創建年代は不明だが、唐代に修復された折りに宝光寺と呼ばれるようになり、宋代の全盛期には三〇〇〇人の僧侶がいたといわれている。

正門を入って境内に足を踏み入れると、日の前に舎利塔（唐代に建てられた一三層、高さ三〇メートルの塔）がそびえる。

羅漢堂は一八五一年に建てられ、内部には等身大くらいの羅漢がずらりと収められている。五百羅漢を見るのは武漢の帰元寺、昆明の筇竹寺に続いて三度目のことだったけれども、ここの五百羅漢は金色の僧衣に身を包んだものだ。喜怒哀楽様々な表情とそれぞれの座像の発する無言のまなざしのかたわらを歩いて行く。

一塔、五殿、一六庭からなる宝光寺の境内をひとまわりして、たまたま目についた茶園で一服。

宝光寺茶園に流れる穏やかな時をかき乱さないようにと、僕は湯呑にふたをして静かに立ち上がる。さて、と口には出さない気合を自らに入れる。

宝光寺を出て、新都から火車北站まで二時間ほどもかかっただろうか。新都を出発したバスはしばらくは快調にとばしていたのだけれども、成都に近づくにつれて大渋滞に巻き込まれてしまったのだ。僕は始発からの乗車だったので座っていられたのだけれども、途中乗車の乗客などは手すりにつかまりながら、とろとろと動いては止まるバスにうんざりとしたような様子だった。渋滞はとくに跨線橋のあたりがひどくて、火車站を目の前にして一時間近くもかかった。気の短い乗客はさっさと見切りをつけて降車し、車を避けながら歩いていった。

午後も遅く、ようやくにして火車北站に到着した。そのまま一六路の路線バスに乗り換えて市街中心地へ。というのも、明後日には成都を出発してラサに向かう予定だったし、おそらくはこれまで以上にシビアな旅行になると思われたので、できるだけ余分な荷物を処分してしまいたかったのだ。火車站のロータリーに面して、小さな郵便局はあったのだけれども、国際郵便の窓口はなくて、もっと大きな郵便局でなければ国際郵便は扱ってもらえないものと思ったのだ。地図を調べてみると、市の中心に位置する市政府の脇に電報大楼というのがあったので、もしかしたら郵便局も併設されているかもしれない。

一六路の路線バスは市の中心部を縦貫する人民路を走る。市の中心に位置する市政府のところでは人民路は市政府をはさむようにして一方通行の二つの道に分かれ、市政府の南側で再び合流する。市政府の南側は大きなロータリーのようになっていて、白い大きな毛沢東像がそびえてい

る。毛沢東像の脇には何やらスローガンのようなものが記されたアドバルーンが数個ゆらゆらと夕刻の空に漂っていた。

市政府を少し南に下りた所でバスを下車し、電報大楼の方へ歩いていった。夕刻の人民路の歩道ではいろいろな物売りが店をひろげていて、賑やかだった。盲の人が足で金属性の打楽器を打ち鳴らしながら胡弓を弾いていた。また、別の盲の人は太鼓を上手に叩いて、道行く人々の足を止めていた。

三峡石の首飾りを並べている物売りがいて、ちょっと興味を引かれたので座り込んで物色した。三峡というのは重慶―武漢の間に位置する長江の峡谷で景勝地になっているのだけれども、今回僕は行くことができなかった。三峡石というからにはそこで採れた石なのだろうか。本当にそうなのかどうかはともかくとして、いろいろな形をした二、三センチほどの平たい石に彩色をして飾りに漢字を書き込んである。一個八角。

毛沢東像のあるロータリーまで戻り、市政府横の電報大楼を覗いてみた。大きな建物をぐるっとひとまわりしてみたのだけれども、電報大楼はやはり電報電話局といった様子で、郵便局は併設されてはいないようだった。地図をどう捜してみても他に郵便局らしきものは記されていないので、郵便局を捜すのはあきらめた。ダメでもともとで、明日火車站の脇にあった郵便局に当ってみることにしよう。

行くあてもないままに、夕刻の街をぶらぶら．人通りのない裏道を歩き、また人民路に戻り、体育館脇の道を歩き、少し賑やかな通りに出た。しばらく行くと、陳麻婆豆腐店があった。それは市街地図にも載っているし、ガイドブックでも紹介されている元祖麻婆豆腐の店なのだけれども、ちょうど夕食の時間帯でもあって満員だった。ひとりでテーブルにつくのも気が引けたのであきらめた。

再び一路バスに乗って火車北站へ。

日もとっぷりと暮れて、腹も減ってきたので早く招待所に帰りたかったのだけれども、火車站から招待所の方へ行くバス路線が分からない。朝、招待所付近から乗った二四路バスは火車站が終点の一方向路線になっているようで、地図を調べても招待所付近を通るバス路線が分からないのだった。仕方がないので、地図を頼りに歩き始めた。跨線橋のある道路は遠回りなので、初めての道をたどった。

火車站から東へ、二環路という大通りを歩く。火車站の賑わいはすぐになくなって、ただっ広い道路がどこまでも続くだけ。暮れ落ちた歩道には所々に桃を並べた露店がそろそろ店仕舞という様子で店を出していた。

一〇分ほど歩いて、これと見当をつけた道を北上する。地図では成彭公路と記されている道なのだろう。ほとんど街燈のない薄暗い道。方向は間

違ってはいないにしても、暮れ落ちた見知らぬ道をたどっていくのは不安だった。人通りもほとんどない。

やがて小さな踏切があり、折しも下りた遮断機の前には数人の人や自転車や荷車。

踏切を渡ると何軒かの食堂や屋台が暗い道に明かりを投げかけていたが、それを過ぎると再び寂しい通り。方向は決して間違ってはいないはず、と自分に言い聞かせるようにして歩き続けた。

地図上の距離よりもずいぶん歩いたように感じたけれども、不安を打ち消すようにして歩いていると、やがて見覚えのある招待所付近の風景に出た。

昨夜と同じ食堂で夕食をし、昨夜と同じ商店で春城（煙草）と山城啤酒を買い込んだ。

人民解放軍の門を通り抜けようとすると、衛兵に誰何された。ビクッとして立ち止まり、招待所に泊まっている者だと告げる。